MY NEW DAYS

OOQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＹ　ＮＥＷ　ＤＡＹＳ

【Ｎコード】
Ｎ８７８６Ｍ

【作者名】
ＯＯＱ

【あらすじ】
折原　優は、高校受験をひかえた中学３年の夏に交通事故で両親を亡くしてしまう。
悲しみにくれる優だったがなんとか立ち直り、中学卒業後、叔母の宮森理子の家へ住ませてもらうことに。
近くの高校にも無事合格。ちょっとお金持ちなお嬢様や普通すぎる女の子、とても可愛がってくる先輩にツンデレいとこ。

楽しい人たちがとりまく優の新しい生活これから始まる・・・。

００話　プロローグ（前書き）

初投稿です。
多くの人に読んで楽しんでもらえたら嬉しいです＾＾

００話　プロローグ

・・・春。

入学、新学年への進級、入社、などなど。
これから始まる何かに、人々は夢いっぱい希望いっぱいだろう。
俺もそのうちの１人。

あ、ゴメン。自己紹介がまだだった。

俺の名前は折原（おりはら）　優（ゆう）、最近誕生日を迎えて１６歳。
去年の夏に交通事故で両親を亡くし、この春から叔母の家に住まわせてもらうことになったんだ。

・・・え？そんなヘビーな過去をさらっと打ち明けていいのかって？

まぁまぁ。いつまでもズルズル引きずってられないし、長々と話されたっていやだろ？
これでも、事故の直後は大変だったんだから。さ、この話は終わり。

というわけで、俺は駅の入り口で、迎えに来てくれることになっている
叔母の宮森（みやもり）　理子（りこ）さんを待っているわけだが。

ふぅ。さっきから１０分以上待っているが、来る気配は一向にないね。どうしようか。
そんなことを考えていると、ポケットに入っていた携帯が鳴りだした。

?.ｆｒｏｍ　宮森理子

ゴメ～ン、今起きた（ｖ｜；）
もう少し待ってて。あと２０分くらい！！〃

・・・。そういえばこんな人だったかも。

一応地図はもらっていてよかった。
歩いて行くので大丈夫です。とメールを返し、俺は桜並木の下を歩き始めた。

００話　プロローグ（後書き）

初心者なので至らない部分はたくさんあると思います。

誤字脱字、その他の指摘、

感想やアドバイスなどもらえたら嬉しいです。

よろしくお願いします＾＾

０１話　道端の、出会い（前書き）

長いことさぼってしまいました・・・ｏｒｚ

まだ１話なのに。

０１話　道端の、出会い

駅から歩いて１０分ほどたった。

「お、あとはもう少しこの道をまっすぐ進むだけか。そんなに遠くなかったみたいだ・・・、ん？」

優は道の端っこにポツンと座りこんでいる人影を見つけ、走って近くまで行った。
遠くからでは分からなかったが、どうやら同じくらいの年の女の子のようだった。

「あの、どうしたんですか？」

「あ、ええ。足をくじいてしまって・・・。家に帰ろうにも、まだ痛くて立てないんですよ。」

それは大変だ、と優は思った。
優はその名のごとく優しい少年である。そんな彼が困っている人を見捨てられるはずもなく・・・。

「家はどこですか？」

「え？この道をもう少しまっすぐ行ったところですけど・・・。」

「僕が送っていってあげるよ。」

「え！？そんな、悪いですよ。」

「僕も同じ方向に向かうんです。それに、困ってる人は放っておけないたちなんですよ。」

「う～ん・・・。じ、じゃあお言葉に甘えて・・・。」

じゃあのって、と優は彼女に背を向けてしゃがんだ。
なんとか背にしがみついてもらい、優はおぶって歩き始めた。

「そうだ、自己紹介がまだだったね。俺は折原優。今日この辺に引っ越してきたんだ。」

「あ、私は中条咲希（なかじょうさき）っていいます。
そういえば、優さんもこの道をまっすぐ行ったあたりに向かうって言ってましたよね？」

「うん、そこに引っ越すことになってるんだ。それと、俺のことは優でいいよ。」

「あ、はい。それより、ご近所さんだといいですね～。」

「そうだね～。せっかく出会えたんだしね＾＾」

「ほえっ！？（／／／o／／／）」

咲希は真っ赤になってしまった。しかし、優に特に気にした様子はない。恐るべし。
そんなこんなで雑談をしながらだんだんうちとけていった。

そして数分後。

（そろそろ理子さんの家に着くなぁ・・・・。）

とそんなことを優が考えていると・・・・。

「あ、家ここです。」

背後から咲希が言った。

・・・・ん？

「・・・・。」

「どうしたんですか？あ、家ですか？私のお父さん医者なんですよ。」

「へ、へぇ～。そうなんだ。」

確かに。この家の大きさはお金持ちだと思わざるをえないが。

それよりも・・・・。優は隣の家の表札を見る。

「・・・お隣さんだったとは。」

「え！？あ、じゃあ理子さんが言ってたいとこって言うのは・・・・。」

父さん、母さん、楽しくなりそうです。

０１話　道端の、出会い（後書き）

アドバイス、感想などよろしくお願いします＾＾

０２話　いとこ、帰省（前書き）

咲希を家に送った後、隣の理子さん家（優の引っ越し先）に無事到着。

部屋割り、宮森家のルール等をみっちり教え込まれた。

02話　いとこ、帰省

チュンチュン・・・。小鳥たちが朝を告げる。

「ふわぁ・・・っと。」

眠そうに眼をこすりながら優は体をおこした。
現在の時刻は午前7時。春休みなのでもう少し寝ていてもよさそうなものだが、優は昨日引っ越してきたばかり。2階にある優の部屋はベッド以外ダンボールだらけである。

「朝ご飯食べたら、部屋の整理でもするかな。」

と、階段を下りていく。理子さんは起きているようだった。

「おはようございま・・・す、理子さん。」

「ほはよ～。ずずずっ・・・。」

朝からカップヌードルを食べていた。何ともまた偏った食生活だこと。
今日のお昼頃に真央が帰ってくるからそれまでこれで我慢して、とテーブルの上の未開封のカップヌードルを指さす。

「真央？・・・あ。」

優は疲れていたためかすっかり忘れていた。
宮森真央。理子の娘＝優の従妹。優の1歳年下である。優の両親の葬式以来会っていなかったが、そのときになかなか美人になったも

のだと思ったのを思い出した。
しかし、この年で料理ができないのはいかがなものか、とひそかに優は思った。

「真央はどこいってるんですか？」

「中学校最後の年だからねぇ。友達との思い出作りに旅行に行ってるの。」

そうなんですか、と相槌を打ちつつ、テーブルの上のカップヌードルにお湯を注ぎ、
シ〇タとパ〇ーを目の前にしたム〇カ大佐のごとく、３分間待ってやるのだった。

～数分後～

「さて、部屋の片付けといきますか！」

（ピンポ～ン）

誰だろうかと思いつつ、今いきますと返事をして玄関に行くと・・・。

「おはようございます、優・・・・・・くん。」

咲希だった。？優″でいいと言ったのだが、どうやら先にはこれが限界らしい。まったくもって可愛らしい。

「昨日のお礼に、あの、引っ越したばかりだとお部屋とかの片付けが大変かなと思って。手伝わせてもらおうと思って。」

「ホント？助かるよ、ありがとう。」

優は自覚なしのイケメンフェイスでさわやかに感謝の意を伝える。

「あぅ・・・（／／／∇／／）、いえお礼を言うのはこちらの方です・・・。」

「どしたの？顔真っ赤だよ？？」

恐ろしいものである、まったくもって。

とまぁそんなこともほどほどに、優と咲希は2階に上がり優の部屋の片づけを開始するのだった。

「ふぅ。こんなもんかな。」

「きれいに片付きましたね～。」

やはり、人が1人でもいるのといないのとでは違うようである。優の予想を上回る速さで、作業は昼頃に終わっていた。

「咲希ちゃん。真央もそろそろ帰ってくるから、お昼食べていきなさいな。」

「え、いいんですか？じゃあお言葉に甘えて・・・。」

といった瞬間・・・。

「ただいまぁ～！！優兄(ゆうにい)いる！？」

いとこが、帰ってきました。

０２話　いとこ、帰省（後書き）

感想、アドバイス等、よろしくお願いします＾＾

０３話　友達の、お友達（前書き）

＜前回＋ストーリー＞

真央が帰ってきた。

03話　友達の、お友達

「ただいま～！！優兄(ゆうにい)いる！？」

真央が勢いよく扉を開けて入ってきた。

「おぅ、真央。おかえり＾＾」

例によって例のごとく、優はイケメンスマイルでお出迎えである。

「優兄(ゆうにい)！あ、咲希さんも！！」

「おかえりなさい。おじゃましてます。」

「理子さんが、真央が帰ってくるからお昼食べてけって言ってな。それで待ってもらってたんだ。」

「そうなの？ならちゃちゃっと作るから、もうちょっと待っててね咲希さん。」

「ありがとう、真央ちゃん。」

言うが早いか両手に持っていた荷物をほっぽり出して、真央はキッチンに走って行った。

優は荷物をきれいに整頓してよせ、料理ができるまで咲希と雑談をして時間をつぶすことにした。

～真央視点～

テーブルの方から楽しげなはなし声が聞こえる。
現在、カルボナーラをつくっている。

・・・うらやましい。私も、今すぐ優兄とおしゃべりがしたい。
家の扉を開けて優兄を見た瞬間、とびつこうと思ったのに。咲希さんをみつけたから何とかこらえたけど。
親戚だから、小さいころから何回も会っている。
ずっと、ず～っと。優兄のことが好きなのだ。
かっこいい顔も。優しい性格も。頼れるところも。とにかく全部。
あんなにいい男なのだから、咲希さんが惚れてもおかしくない。

「絶対にわたさないんだから・・・！！」

帰ってきて早々、ツンデレ真央さんはひそかな決意を抱くのであった。

「おまたせ～＾＾」

出来上がったカルボナーラを真央が持ってきた。

「おいしそうだな。」

「おいしそうですね。」

真央は心の中でひそかにガッツポーズをした

「あれ？理子さんは？？」
優はそう言って周りを見渡す。
「お母さんなら、部屋で執筆しながら食べてるよ。」
「そういうことか。」
説明していなかったが、宮森理子は小説家である。
～数分後～
「「「ごちそうさまでした！！」」」
きれいにたいらげられた皿が三枚。テーブルに並んだ。
満腹感につつまれ、優は少し眠気を感じた。せっかく片付けたことだし、すこし部屋で寝ようか。
「それじゃ、わたしはそろそろ帰りますね。」
咲希が立ち上がった
優も立ち上がり、一緒に玄関までついていく。
「では。優くん、真央さん、お邪魔しました。」
「またね。」

「またいらしてください。」

咲希は扉をあける。すると・・・。

「あ、咲希～。一昨日借りた本返しに来たんだけど家にいないからさ。どこいってたのかと・・・あれ、その人は？」

友達の、友達がいました。

０３話　友達の、お友達（後書き）

感想、アドバイス等、よろしくお願いします。

０４話　まだまだ、春休み（前書き）

あらすじ
奏さん登場。

そのうちキャラ紹介載せますね＾＾

０４話　まだまだ、春休み

「あ、咲希～。一昨日借りた本返しに来たんだけど家にいないからさ。どこいってたのかと・・・あれ、その人は？」

扉を開けると女の子がいた。

「あ！奏ちゃ～ん。ごめんなさ～い。」

「私が勝手に来ただけだから別に大丈夫よ。それより、その人は？」

「あ、ごめんなさい。彼は折原優くん。昨日お隣に居候しにきたの。優くん、こちらは榎本奏（えのもとかなで）ちゃん。私の友達よ。」

「よろしく、奏さん。」

「こちらこそ。私のことは奏でいいわ、優。」

互いに紹介された二人は握手を交わす。

その光景を見ていた咲希はなんだかおもしろくなさそうだった。

その後数分間、世間話に華を咲かせる二人。

その最中、優はふとその言葉を耳にした。

「あ、それとね咲希。国語のテキストだけまだ終わってないんだけど、何ページまでだったか覚えてる？」

「う～ん・・・。確か、１０ページまでじゃなかった？」

「・・・・!!」

突然、優の顔が引きつった。
口がパクパクしているが言葉が出てこない。

「どうしたんですか？優くん。」

「どうしたの？優。まさかとは思うけど・・・・」

「うん。宿題忘れてた・・・・。」

「ベタだね」「ベタですね」

見事に彼女らの声がハモる。
確かにその通りである。

「で、ですが、そんなに量はないので・・・・。」

「うん。”がんばれば”なんとかなるとおもうよ、優。」

がんばればを強調する奏。

そう。入学式まであと5日。

まだまだ、春休み。

０４話　まだまだ、春休み（後書き）

短めですいません。

とりあえず奏との出会いをきり良くさせました。

ヒロインはあと一人登場予定です（今現在）

入学式後をお楽しみに＾＾

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

０５話　はじまりの、日（前書き）

話をどこで区切ればいいか悩みます＾＾；

05話　はじまりの、日

「・・・眠い。」

あの、春休みの宿題が終わってないと気付いた時から6日。
総勢5教科の宿題と壮絶な戦いを繰り広げた末、今日の2時に決着がついた。

春休みは昨日で終了。本日は入学式。しかし、登校時間の都合上、起床したのは6時。
睡眠時間4時間未満はさすがに寝不足であると思う。

「朝ご飯食べて・・・顔洗って・・・ふわぁぁあ。」

今日は何回あくびをすることになるのか、などと働かない頭を使いつつ、優は階段を下りていく。

「おはよう優くん・・・て、なんだか眠そうね？」

理子(りこ)はすでに起きていた。だらしないのかそうでないのかたまに分からなくなる人だ。

「ちょっと宿題忘れてまして・・・。今日やっと終わったんですよ・・・ふわぁぁあ。」

「はい、優兄(ゆうにい)。」

真央(まお)がホットココアを差し出してくれた。

「ありがと。真央(まお)。助かるよ＾＾」

「う・・・ん（／／／∇／／）。でで、でも・・・・・・大丈夫？？」

「？？・・・まぁ、なんとかするよ＾＾」

優はどこまで行っても優なのであった。

少なからず眠気は残っているものの、仕方がないので身支度をして、優は家を出た。

「あ、優くん。おはようございます。」

隣の家からちょうど咲希が出てきた。

「おはよう、咲希。」

「なんだかとても眠そうですね・・・。宿題は終われましたか？」

「なんとか今日終わったよ。おかげであくびがとまらふぁあい・・・よ。」

「だからお手伝いしましょうかと申しましたのに・・・。」

そう。咲希と奏は優に救いの手を差し伸べたのである。

しかし、優は？自分のためにならないから〃と断ったのだ。
まったくもって流石（さすが）である。

そんな感じに話をしながら歩いていく。学校にはすぐについた。

「優～。咲希～。おはよ～」

学校の玄関の前。優たちが歩いてきた道の反対の道から奏がやってきた。

「おはよう奏ちゃん」

「おはよう、奏。」

3人は玄関の前のクラス発表の紙に向かって歩いていく。

「同じクラスになれるといいな＾＾」

「ふぇ！？は・・・はいぃ（／／／∇／／）」

「っ・・・そ、そうね（／／／へ／／）」

新学期は、もうすぐそこだ。

０５話　はじまりの、日（後書き）

感想、アドバイス等、よろしくお願いします＾＾

０６話　ぶつかって、先輩（前書き）

色々な方に見ていただいております。
皆さんありがとうございます＾＾

入学式にはいっていけないｏｒｚ

06話　ぶつかって、先輩

優たちはクラス分けの紙を見た。

「「「「・・・お！？」」」」

結果。

ベタにもほどがあるくらい、６組まであるうち3人とも４組。

「よかったです～。」

「そうね～ホントに。」

「知り合いがいた方がいいもんな」

優は未だに目をこすっていた。

紙にさっと目を通した後、３人は自分たちの教室へ向かった。

咲希と奏はよほど楽しみなのか、さっさと階段を昇っていく。

優も楽しみではあるが眠気はそう簡単には消えてはくれず、何歩か

遅れてゆっくり昇っていく。
そのうち距離がどんどん離れ、優は2人の姿が見えなくなってしまった。

「・・・ふわぁっと、俺もシャキッとしないとな。」

階段を昇りきり、ひとつあくびをすると、軽く頬を叩いて廊下を進んだ。

――――タッタッタ・・・

廊下の突き当たりの向こうから足音が聞こえる。
優は少し遅めに、廊下の端を歩いた。
足音はだんだん近づいてくる。

――――タタタタッ!!

ついにその足音はつきあたりにさしかかった。しかし、その足音は優の目の前に現れた。

ドン！！

優は一瞬何が起きたか分からなかった。
何か大きくて柔らかいものが優の顔を圧迫していることをかろうじて認識したが。

「っつつ～・・・。」

「優～遅いから迎えに来てあげたわよ～」

「優く～ん、どうしたんですか～」

そこへ、遠くから咲希と奏の声がきこえてくる。
しかし、上に乗っかっている人が動いてくれないので優は身動きが取れなかった。

「優！！！！・・・って・・・先輩？」

「優く・・・ん！！・・・ってあれ？結菜センパイ？」

「え？」

咲希の言葉に反応したのか、優に乗っかっている人はもぞっと動いて顔をあげた。

「あれ？さきとかなちゃん？？ここにはいったんだね～、オメデト～」

「あ、ありがとうございます・・・ってそれより、優くんが・・・。
」
「ユウクン???」
そういって優の方を向く。
「あ、ごめんね、今どくから」
そういってその女の先輩――――――結菜は優の上から下りた。
「ごめんね。私は山本結菜（やまもとゆな）。2年生よ」
そう言って結菜はその大きな胸を張った。
「いえ・・・。俺は折原優って言います。」
「ふむふむ。よろしくね、ゆっきゅん」
「ゆっきゅん?」
「結菜センパイは気にいった男の子にはあだ名をつけるんだって。」
「だってゆっきゅんなかなかかっこいいし、なんか優しそうなんだもん。でも、いとこ以外にあだ名つけたのはあなたが初めてよ、ゆっきゅん」
「あ、ありがとうございます・・・。」

優はどうやら先輩には弱いらしい。少々照れ気味で答えた。

「う～ん、ゆっきゅんかわいいっ！！」

そう言って結菜は優に抱きついた。

「「あっ・・・！！」」

咲希と奏が同時に声を上げる。

「あ、仕事！！・・・じゃ、私はこれで。ばいばいさき、かなちゃん、ゆっきゅん！！」

そういって結菜は廊下の向こう側へ走って行った。

優、咲希、奏はしばらくそれを見送る。

「さ、行こうか優。」

「行きましょう、優くん。」

咲希が右腕、奏が左腕をとり、優を半ば引っ張る形で歩き出した。

優はわけのわからないまま、黙って教室に向かうのだった・・・。

０６話　ぶつかって、先輩（後書き）

なんだか結菜の性格が最初に考えてたのと変わってしまった気がします。
真央の出番をそのうち作ります＾＾

感想、アドバイスよろしくお願いします

07話　ようこそ、高校生活（前書き）

このような未熟者の小説を楽しみに待っててくれた皆さん。
とても長い間放置状態で大変申し訳ありません・・・。

時間のやりくりが下手くそで＾＾；
これからもそんなに細かくは更新できないとは思いますが
ちょこちょこ書いておくようにしますｍ（＿＿）ｍ
本当に本当にごめんなさい（つД｡；）

07話　ようこそ、高校生活

優は咲希と奏に引きずられ教室に入った。
入学初日からそんな珍しい光景を見せられたクラスメイトたちは驚きを隠せないようだ。
通っていた中学校がこの地域ではない優は、
咲希と奏以外に、知り合いましてや友達などいるはずがない。
友達を作る前に色々と大変そうだと、優はひそかに思うのであった。

「おはよ～！」
「おはようございま～す！」

しかし、そんな優の心配も知らず咲希と奏はクラスメイトに声をかけていく。
早くみんなと仲良くなりたいのだろう。
優も人見知りする性格ではないので、みんなに声をかけたかったが状況が状況なので、２人のようにはできないでいた。
そんな中、優たちのうしろからとある男子が入ってきた。

「おい～っす！・・・お？入学早々モテモテだね～。俺は新井隼人（あらいはやと）、ヨロシク！」

その男子は今まさに大変な状態の優をみつけるやいなやさっそく声をかけてきた。
しかし、他のみんなは優を見てフリーズ状態なので優としては非常に助かった。
優も２人に放してもらい、それに応じる。

「俺は折原優（おりはらゆう）。よろしく！」

「うおっ、笑顔がまぶしいな。まぁ、よろしくな、優！」

「こちらこそ、隼人！」

2人はがっちりと握手を交わす。

「なんだかとてもまぶしいですわ・・・。」

「なんなのあのイケメン2人組・・・。」

咲希と奏はその様子を見て呟いた。

言及していなかったが、隼人もなかなか整った顔立ちをしている。

すらっとしていて背も高く、優といい勝負だろうという感じである。

――――――ガラッ――――――

突然、閉まっていた前の方の扉が開いた。

「よ～し、みんな、席に着け～」

それぞれおしゃべりを楽しんでいた生徒たちはあわてて席に着く。

優たちも急いで自分の席を確認して座った。

「よし、いいな。え～、私が今日から君たちのクラスの担任になる、小西理智（こにしのりとも）だ。みんな、よろしく。」

「「「よろしくお願いします！」」」

「さすが、新入生。元気があるな！まだまだ緊張していると思うが、少し肩の力を抜いて、リラックスしてくれ。」

理智は生徒たちに明るく呼びかける。

「入学式までまだ時間はあるから、みんなに軽く自己紹介をしてもらおうか。また後日ちゃんとしたものをやるが、少しくらいは打ち解けておかないとな。よし、名簿1番、赤平！」

「あ、はい！ぼくは・・・」

と、さっそく自己紹介タイムが始まった。
今は名簿順に座っている。優は3番なので、すぐに順番は回ってくるだろう。
優は先ほどのみんなに対するイメージを変えられるいい機会だと思っていた。
そして順番が回ってきた。
優は立ち上がり、みんなの方を向いた。

「僕は折原優（おりはらゆう）といいます。高校からこの地域に引っ越してきました。多くの人と仲良くできたらなって思ってます。よろしくお願いします。」

最後に魅惑のイケメンスマイルで締めくくる。
多くの女子生徒が優の方を見てぽけっとしている。
その様子を見た咲希と奏が面白くなさそうな顔をしているのは秘密だったりする・・・。
どちらにも気付かず、優は席に着いた。

その後、テンポよくみんなの自己紹介が終わり、入学式の準備に入った。
偉い人たちと長い話を聞くのはとても退屈だと思う反面、これから

の学校生活に夢と希望がたくさんな優であった。

・　・　・　・　・　・

入学式は思ったより早く終わった。
クラスのみんなは式の緊張感から解放され、各々友人とおしゃべりを楽しんでいる。
しかし、咲希と奏は早々に変える準備をした。早く優を連れて帰るためである。
そんな2人とは裏腹に優は隼人と楽しそうにおしゃべりをしている。
それもそのはず。
こちらに越してきて初めてできた男友達なのだから。
しかし、そんな優とは反対に気が気じゃない2人は、さっさと帰ろうと優の方に駆け寄る。
だが、そんな2人の心配事はすぐそこまで来ていた。

メルアド交換を迫る女子たちに優と隼人が囲まれたのはその直後であった。

０７話　ようこそ、高校生活（後書き）

感想、アドバイス等、よろしくお願いします

※誤字訂正しました＾＾

指摘ありがとうございました

０８話　始まった、高校生活（前書き）

キャラの登場回数の配分に迷っております＾＾；

08話　始まった、高校生活

「おはようございます」

「ん、優兄。おはよ。」

「おはよう優くん。・・・あら、なんだか眠そうね？」

「え、えぇ、まぁ。ふわぁぁ・・・。」

優がとても眠い理由。
それは他でもない、メルアド交換を迫ってきた女子たちからのメールであった。
入学式の後、一緒に帰ろうとしていた咲希たちを阻止するかのように楽しくおしゃべりしていた優と隼人をクラスの女子が包囲。
交換が終わった後も、およそ３０分ほど質問攻めをくらったイケメン２人組。
やっとの思いで解放され、帰宅してゆっくりしていると
携帯が数回鳴り表示される数多のメール受信完了の文字。
律義にすべてに返信していた結果、就寝時間はとうに２時半を過ぎていた。

「モテる男はつらいわね、優くん？」

「あはは・・・そんなことないですよ。」

優はひきつった笑みで理子に答える。

「はい、優兄！朝ご飯！！」

言うと同時に、真央(まお)は茶碗をテーブルに叩きつけた。
「??・・・どうしたんだ真央(まお)・・・なんかあったのか?」
「べっつに!お母さん、あたしもう行くね!」
「あらあら、気をつけてね。」
「うん、行ってきま〜す!」
「何だったんだろ・・・。」
「ホントに、モテる男はつらいわねぇ・・・。」
首をかしげる優(ゆう)を見て、一人つぶやく理子(りこ)であった。

・　・　・　・

朝食を素早く済ませて身支度を整え、優は家を出て学校へ向けて歩き出した。
しばらく歩いていると、
「優(ゆう)く〜ん、待ってくださ〜い!!」

「おいていかなくてもいいじゃないのよ、優(ゆう)～！」

背中からかかった聞き覚えのある声に、優(ゆう)は足を止め振り返る。

すると、あわてて走ってくる咲希(さき)と奏(かなで)の姿があった。

「あ、おはよう。ふぁ・・・。」

「おはようございます～」

「おはよう、ってなんだか眠そうね。」

「ふあ、うん、ちょっと遅くまでメールしてて・・・。」

あくびをかみ殺して優(ゆう)が答えた瞬間、2人の目の色が変わった。

「さ、行きましょうか優くん？」

「遅れちゃうから急ぎましょ？」

「え、まだ全然時間ある・・・ってちょ、え？ええ？？」

優(ゆう)は妙なデジャヴュを感じつつ、2人に両腕をとられて登校する形となった。

・　・　・

なんとか2人を説得して解放してもらった優。
3人は校門にさしかかった。すると、彼らの担任、小西理智が立っていた。

「おお、おはよう、折原、中条、榎本。」

「「「おはようございます」」」

「おう、元気があっていいぞ！しかし、おとなしそうな顔してなかなかやるな、折原。」

「え、なんのことですか？」

「はっはっは。こりゃ大変そうだな。」

小西の言葉に咲希と奏はうなずく。

「ま、高校生活はこれからだ！2人とも頑張るんだぞ！！」

「「はい！！」」

3人の会話に全くついていけない優はただ首をかしげるばかりであった。
そんな彼のもとへ、

「ゆっきゅ～ん！！！！」

ガシッ、と後ろから結菜が抱きつく。
突然のことに状況把握ができない優はしばらく固まった。

「おはよう、ゆっきゅん。」

「おはよう・・・ございます、結菜先輩。」

「え？」

「結菜センパイ！？」

その光景に2人が硬直したのは言うまでもない。

「いや～、ゆっきゅん、その制服に合ってるねぇ。かっこいいよ！」

「ほんとですか？あ、ありがとうございます。」

「うん！初々しいねぇ。なんか困ったことがあったらいつでも言ってね？んじゃっ！！」

「あ、はい！」

短いやりとりをかわしたあと、結菜はさっさと校舎内に入ってしまった。

優はしばらく立ち尽くしていたが、後ろから嫌な気配を感じ取り、校舎へ向かうことにした。

そんな優にいましがた到着した隼人が声をかける。

「おっす！優。モテる男はつらいねぇ。」

「お、おぅ隼人。なんかそれ朝にも言われたんだけど・・・。」

「そりゃホントのことだもんな。」

「でもお前にだけは言われたくないような気がするよ。」

「ハハッ、そうか？」

優(ゆう)は隼人(はやと)としばらく会話を交わし、ほっとして校舎内に入っていく。
咲希(さき)と奏(かなで)は完全に優(ゆう)をかっさらうタイミングを逃し、
とぼとぼと2人について行った。

「青春だなぁ。はっはっは。」

一部始終を見て小西(こにし)はそうつぶやいたのだった。

この日は初日で、ちゃんとした授業もなかったのだが
優(ゆう)はずっと変なプレッシャーを感じ、妙に疲れた一日だったという。

０８話　始まった、高校生活（後書き）

感想、アドバイス等、よろしくお願いします＾＾

０９話　放課後の、お買いもの（前書き）

少しあいてしまいましたね・・・。

09話　放課後の、お買いもの

今日も優(ゆう)は、いつも通りの時間に起きた。
朝食をとるため1階に下りていく。

「あ、おはよう優兄(ゆうにい)！」

「おはよう真央(まお)。あれ、理子(りこ)さんは？」

「きっと昨日夜遅くまで仕事してたんだと思う。起きてこないから見に行ったら爆睡してたもの。」

「ふ～ん。」

そういうわけで優(ゆう)と真央(まお)は珍しく2人きりの朝食をとることに。

「そういえばさ、真央(まお)の学校ってどの辺にあるんだ？遠いのか？」

「んとね、優兄(ゆうにい)の学校よりもう少しいったとこかな。」

「へぇ、じゃあ道は同じか。途中まで一緒だな。」

「ふぇ！？・・・う、うん。」

改めて優(ゆう)に言われ、真央(まお)は少しうれしくなった。
しばらく会話をしつつ早々に朝食をすませた2人は家を出た。
2人は並んで歩いて行く
不意に、真央(まお)が口を開いた。

「優兄、今日学校早く終わる？」

「ん？そうだなぁ、まだ新学期始まったばっかりだし多分早く終わるよ。」

「ホント？じゃあさ、放課後、買い物に付き合ってくれないかな？」

「あぁ、いいよ。でも俺まだこの辺よくわからないからな・・・。」

「学校終わったら高校の校門のとこに行くから、待ってて！」

「わかったよ。おっと、それじゃあまたあとでな。」

「え、あ。もう着いちゃったの。うん、またあとでね。」

そういって、真央は少しさびしそうに歩いて行った。

・　・　・　・

「おはよう。」

「お、優、よう。」

「隼人、お前早いな。」

「そんなことないぞ。お前だって早いじゃないか。」
今現在、彼らの教室にいるのは、優と隼人を除いて４人ほど。
始業まであと３０分以上もある。
「というか、お前、咲希や奏と一緒じゃないのか？」
「え？うん。」
「そうか。俺はてっきり一緒にくるもんだと思っていたが。」
「え、なんで？」
「なんでってお前・・・。」
隼人は心の中で2人に同情した。

・　・　・　・

この日の授業も無事に終わる。
優はいそいそと荷物をまとめ、教室を出た。
校門のところに行くとすでに真央が待っていた。

「ごめん、真央。待ったか？」

「ううん。じゃあ行こ？」

優は真央についていく。

いつも買い物をしている商店街はこのあたりのあるらしい。

真央の言うとおり、歩いてものの7分ほどで着いた。

今日の買い物はカレーの材料で、ジャガイモやニンジン、玉ねぎなど

一般的な材料を真央は買っていく。

最後に肉屋に立ち寄ると、

「あら真央ちゃん、今日は彼氏連れかい？」

と、その店のおばちゃんは言った。

「ち、ちちちちち違いますよ！！！！」

真央は慌てて否定する。

「おいおい、そこまで必死に否定するか？」

優は苦笑気味に言う。

すると再び真央は慌てて、

「い、いや、べべべべつに、あの、その・・・。」

「あらら可愛いわね、ごめんね真央ちゃん。お詫びにサービスしと

いてあげるよ。」

そう言って肉屋のおばちゃんは少し多めに肉をくれた。

しかし真央(まお)はあわわとぶつぶつ呟いていてそれどころではなさそうだったので
優(ゆう)は代わりにお礼を言って、真央(まお)の手を引き帰路に着いた。

真央(まお)がさらにそれどころでなくなったのはいうまでもあるまい。

０９話　放課後の、お買いもの（後書き）

少し短めだったでしょうか？

感想、アドバイス等よろしくお願いします＾＾

１０話　れっつ、おでかけ（前書き）

すいません＾＾；
７話で優の名簿を３番にしたために隼人の名簿が２番になります。
席は前後の設定だったんで問題はありませんが、少しミスになりました。
これからは気をつけます

10話　れっつ、おでかけ

・・・今日も、特に問題なく学校が終わった。
みんな帰る準備を始めた。
高校生活にも新しい環境にも慣れてきた優(ゆう)は、なかなかに楽しんで暮らせている。

「それにしても、体育祭かぁ・・・。なんだか楽しみだなぁ」

と、先ほど配られたプリントを見る。
もうすぐ体育祭が始まるそうで、近いうちに出る種目やら何やら決めるらしい。
優は運動は苦手ではなくむしろ少し得意なくらいなので、とても楽しみであった。

「優(ゆう)、今日用事あるか？なかったら遊びに行こうぜ！」

そこへ、前の席の隼人(はやと)が声をかけてきた。

「ん？とくに用事はないかなぁ。いいよ、どこにいくの？」

「ホントか！？といっても、予定はないんだ。」

「なんだそりゃ。う～ん。」

「優(ゆう)く～ん、帰りましょ～」

「優(ゆう)、帰ろう？」

2人で少し考えていると、咲希(さき)と奏(かなで)が近付いてきた。

「おぅ、2人とも。悪いがこれから俺たちは遊びにいくのだ！お前らもくるか？」

「はい！！」

「うん！！」

「でもどこいくのさ・・・。」

調子よく2人を誘う隼人(はやと)を優(ゆう)がたしなめる。

「ふむ、そうだなぁ・・・。」

「だったらさ、商店街にいこうよ。」

奏(かなで)が言った。

「そうですね、昨日だったか新しいお店ができたらしいですよ？」

と、咲希(さき)も同意。

「そうだなぁ、ぶら～っと行って来ますか！！」

他に意見もなく、結局、商店街に行くことになった。

・

・

・　・

「しかし、いつ来てもにぎやかだなここは。」

「ほんとだな。」

優はあたりを見回してそう言った。
少し前に真央とここへ来たことのある優だが、食材の買い物、という目的と
ただついてきただけということもあり、商店街をきちんと把握していなかった。
しかしこうして辺りを見てみると、
雑貨や服などの様々な店があり、人がたくさんいてとても賑わっていた。
そんな優をおいて、3人はとっとと先へ行ってしまう。
慌てて優はあとを追った。

・　・

「優くん、この服・・・似合いますか？」

「うん、素敵だよ」

「はぅ、ありがとうございます。」

「優、このネックレスかわいくない？」

「うん、よく似合ってるよ」

「そそ、そうでしょ。」

・・・さっきからこれの繰り返しだ。
いろんなものを持ってきては優に見せ、自分からきいたにもかかわらず照れる。
隼人はこのコントのような状況を見て、最初は面白がっていたが、次第に退屈になってきていた。

「なぁ、優。あそこのゲーセン行こうぜ～」

「お～、いいよ～。」

「優くん・・・」「優・・・」

と、隼人とともにゲームセンターに行こうとした優の背後から声がかかる。

「「どっちが好み??」」

「え?・・・わぁぁぁっっ!!ふ、2人とも～!!!!」

振り返った優は咲希と奏がかかげていたものを見てまた振り返る。
2人は、それぞれ純白の下着と黒の下着を手に持っていた。

「あら・・・」
「こういうのには弱いのね。」
「意外だなぁ～」

咲希、奏、隼人はそれぞれに言った。

「な、なにがだよっ！？」

優は慌ててゲームセンターへと向かうのであった。

その後、優ｖｓ隼人のガチエアーホッケーバトルが行われ、先ほどの仕返しをするかのように得点を次々と決めた優は、開始数分後、１１対２で圧勝したのだった。

１０話　れっつ、おでかけ（後書き）

エアーホッケーって何点勝負でしたっけ？

感想、アドバイス等よろしくお願いします

１１話　アツいぞ、体育祭（前書き）

すみません、またしても長い間あけてしまいました・・・。

こんな私ではありますが、長い目で見守っていただけると幸いです

＾＾；

11話　アツいぞ、体育祭

「それではここに、体育祭の開催を宣言します！！」

生徒会長の高らかな声が、スピーカーを通してグラウンド中に響き渡る。

綺麗に整列した全学年の生徒は、一斉に吠えだした。

『うちが総合優勝だ！！』『あのクラスには絶対負けないわよ！』

『コーナーで差をつけろ！！！』

どのクラスもかなり気合が入っている。

「俺たちも負けてられないな～」

「そうだな、やるからには優勝獲りに行かなきゃ！」

ぐるっとまわりを見渡した隼人と少し楽しそうな優。

この二人は相変わらずのようだ。

『折原くんのバスケ見に行かなきゃ！！』『隼人さまのサッカーは何時からなの～？』

『２人で騎馬戦だなんてもはや私を殺す気！？』

あちらこちらから聞こえる黄色い歓声。
こちらも相変わらずのようであった。

・　・　・　・

「すごいね・・・ちょっと緊張してきちゃった」

「そう気負わなくても大丈夫よ、咲希が負けちゃっても私がそのぶん頑張ってあげるから！」

「えぇっ！？ひどいよ～」

「アハハ、ごめんごめん冗談だって」

開会式が終わり、教室へと向かう廊下でおかしそうに奏は笑った。
あながち冗談で言ってないようにも見える、と咲希は少し思った。
咲希は勉強よりかは運動の方が得意なつもりだ。

「いいもん。バドミントン、絶対優勝して見せるんだから！！」

「お、言うわね。いいわ、優勝したらお詫びも兼ねてケーキでもおごってあげる」

「ほ、ホント！？・・・約束だからね？絶対絶対だよ！！」

「え、う、うん」

奏は少し引き気味で答えるのだった。

・　・　・　・

「ふぅ～」

トイレを済ませて優は少しリラックスしていた。

「・・・ゆっきゅ～ん！！」

「ん？」

背後から声がして振り返ると、今まさに獲物に襲いかかろうとする野獣のごとく、
結菜が飛びかかった瞬間であった。

「うわわわわ、ゆ、結菜先輩!?・・・ぐあっ!!!」

言わずもがな、防御姿勢をとる暇もなく、ただ結菜に馬乗りをされている態勢になった。

「へへ、ゆっきゅんの上なう!!」

「っつ・・・先輩、どうしたんですか?」

「用事は特にないよー?ぶらっと歩いてたらゆっきゅん見つけたから飛んできただけ!」

「僕はトムソンガゼルやシマウマじゃありませんよ・・・」

「んー、じゃあなんか用事を・・・」

「いやいや、別に無理してつくらなくってもいいですって。それより先輩は何の競技に出るんですか?」

「ん、アタシ?アタシは障害物競争!!」

「え、あの障害物競争・・・ですか?」

優がこういうのには理由がある。
体育祭の参加競技を決めるＨＲで、学級委員長から競技やら規則に

ついて説明を受けた時のことだ。
何も問題なく進むかに見えた委員長の説明は、障害物競争の項目に来てピタリと止まり、

『障害物競争に関しては、何があるかわかりません。そういうしきたりのようです。
　毎年予想の斜め上を行くと、生徒会の先輩方はおっしゃっていました。メインイベントらしいです　　が、出るからにはそれなりの覚悟を・・・だそうです。』

この瞬間教室中がどよめいたのは今でも覚えている。
とりあえず未知の競技で怖いんだろうな、というのが優の見解であった。

「なんかすごくデンジャラスなニオイがしたんですけど・・・」

「ま、確かにハードっちゃあハードかもね。でもなんたってメインイベントだからね！楽しいってことだけは確実だよ！！」

「まぁ、先輩がそういうんだからそうなんでしょうね・・・応援してますから頑張ってください。」

苦笑気味に優は言った。
咲希もどうやら出るらしいので、
何事もありませんようにと優は神様というものにお願いしてみるのであった。

「むっ、なんだかめんどくさそうに答えるねぇ。」

「いや、最初はわりと心配してたんですけど、先輩はさも問題ない

みたいに言ってたので・・・」

「んーまぁね～。でもさすがに緊張したり何やるか分からないからちょっぴり怖かったりはするよ？」

「え、そうなんですか？けっこうさらっと1位とっちゃう感じかと思いましたよ」

「なんか失礼なこと言われた気がする・・・よし、ゆっきゅん！」

「？・・・はい？」

突然声を張った結菜に少し驚きつつ優は応えた。

「アタシが障害物競争で1位とったら、次の休みはデートね！」

「わかりました・・・って・・・えぇ！？」

「おっけーい、それじゃあ約束だよ？それじゃね♪」

ぽかんとしている優をよそに結菜は廊下の向こうへと走り去ってしまった。

「何がどうなったんだろう・・・って、ヤバい！」

ふと見た時計の時刻は9時7分。

優が出場する男子バスケの開始時刻は9時２０分だ。

慌てて駆け出してずっこけ、なかなか帰ってこないため探しに来た咲希と奏に笑われてしまったのは秘密である。

１１話　アツいぞ、体育祭（後書き）

構成の下手さと描写のド素人さにはうんざりしますね、精進しないと。

誤字脱字ありましたらご指摘の方よろしくお願いします。
アドバイスや批評等も大歓迎ですので、よろしければ是非＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8786m/

ＭＹ　ＮＥＷ　ＤＡＹＳ

2011年8月23日23時03分発行